

NPO 法人

# 小金井雑学大学

第 24 号 平成 29 年 1 月

だより

## 今こそ生涯学習が大事な時代

小金井雑学大学 代表理事 五十嵐京子

日本は急激に高齢化が進み、平均寿命は世界トップとなり、長生きの国になりました。昨年最後の講義となった「遊びとレクリエーション」で飯坂先生は、戦後の日本と今の日本で、日本人一人当たりの摂取カロリーはほぼ同じだが、現在メタボや肥満などの問題が出ているのは消費カロリーが減っているから、と説明されました。生活のスタイルが大きく変わった

だけでなく、核家族化も進み人間関係も変化しました。子育てや親の看取りを傍で見るという経験がなく目前に来て慌てるという例、人間関係が築けないことから起こる引きこもりなどのような深刻な問題も増えています。

一方で技術の進歩は目覚ましく、IT化は日進月歩。パソコンの買い替えも頻繁に行われるようになり、スマホは携帯電話というだけでなくもう持ち歩くコンピューターです。電化製品にもコンピューターが組み込まれ、使いこなすのも一苦勞、そしてロボットの登場、人工知能の可能性を考える時代になりました。

こうした社会や生活の変化

の中で、人々は健康に関する知識を増やし、生や死について学びなおし、それぞれに新しい技術を身につけるために奮闘しています。IT化は人間の働き方も大きく変えてきましたし、これからも変わるでしょう。

人生 80 年の時代に学校教育は大学まで行っても 16 年。残りの時間は生涯学習として自ら選択し、学習をしなければならぬ期間です。実際に生きるためにはありとあらゆるところで新しい知識を得なくてはならず、それは反面では人間とは何かという問いも突き付けているようです。どんな学びが必要なのかをよく考えることが、今ほど必要な時代はないように思います。身近な学びの場として小金井雑学大学がお役に立てるよう今年も頑張っています。



# 縄文時代にも箸はあった

元産経新聞記者 國米 家己三

「どう考えてもおかしい」。ずっと長い間そう思ってきました。箸のことです。

箸は2千年ほど前に中国から日本に入ったと、多くの考古学者はいます。「では、それまでは何で食べていたのですか」と問うと、「手で食べてたんだよ、手で！」と断定的です。それが、どうしても腑に落ちません。

今から1万6千5百年前の昔、縄文人は土器をつくり出します。食材の煮炊きや堅果の

アク抜きなどに土器を使いしました。煮たばかりの、焼いたばかりの熱い食べ物を縄文人は手で食べていたのでしょうか。1万数千年の間、箸も匙も考えつかなかったのでしょうか。

7千年前には漆塗りの櫛をつくり、ひどく硬度の高いヒスイにきれいな穴をあける技術を持ち、三内丸山では巨大な神殿風の建物を建てた縄文人が、箸だけは思いつかなかったというのでしょうか。

ところが、やっぱり出現しました。考古学者ではなく、漆学専攻の東京芸大教授が著書「お箸の秘密」で、北海道礼文の舟泊遺跡や福井の鳥浜貝塚で漆塗りの木の箸が出土していると書いている。また骨製の箸らしいも

のも発掘されていると。漆塗りの、反りのある匙も東村山市の下宅部遺跡でみつかっています。

世界の東の果ての日本列島。先進文化はすべて外からやってくる。そう思い込んできたのも無理はないのかもしれない。しかし常識的に考えてもおかしいことについては、足元の自分たちの文化を、もつと丹念に吟味すべきです。なにも箸に限りません。われわれの現代にも同じような思い込みによる海外先行説がたくさん溢れているのではないのでしょうか。長岡半太郎が原子核を発見したのの後発の「ラザフォード・モデル」が日本の学会を席巻したり、東芝の研究者が開発したフラッシュメモリーの真価が読めず海外に量産を許したりなどは、そのほんの1例に過ぎないのです。



第422回講義 7月17日



19周年記念講演のお知らせ

「広告が時代を変え、時代が広告を変えた」

脇田 直枝氏 (マーケティングコミュニケーションライター、元電通アイ社長)

4月2日(日) 14時00分~15時15分

会場は萌え木ホール(商工会館3階)です。

終了後同会場で懇親祝賀会開催(会費3000円希望者のみ)

# 天平のロマンを現代のまちづくりに！

武蔵国分寺歴史交流大使・元国分寺市長 星野信夫

小金井雑学大学の皆さん、その後もお元気に勉学に励まれていることと思います。昨年は伝統ある貴校において講義の場を与えていただきありがとうございます。

私は公職を退いた後、国分寺の歴史を分かりやすく楽しく語ることをライフワークの一つとしております。今住むまちの歴史を学ぶことはまちへの愛着や誇りを強め、「自分のまちのために

何かをしたい」という意欲を高めることにつながります。

これからのまちづくりには、市民の力が必要です。政治家や行政職員だけでなくすべての課題解決が図れるものではありません。市民も積極的に相応の役割を果たすべき時です。遥か天平の昔、時代の制約はありながらもそのような問題提起をされたのが聖武天皇ではないかと思えます。

聖武天皇は「仏教」すなわち「人の心の力」で国難を打開しようとお考えになりました。そして、国分寺創建・大仏造立の詔では「動物も植物もことごとく栄える国をみんなで造ろう！」と呼びかけられたのです。ここからは現代に通じる「自然との共

生」や「市民協働」の理念を読み取ることができません。

武蔵国の人々は聖武天皇の呼びかけに応え、全国最大規模の国分寺をみんなで造り上げましたが、まことに残念なことに分倍河原の合戦で焼失してしまいました。平和を願って建立された国分寺が、皮肉にも戦争によって焼かれてしまうという運命をたどったのです。このような歴史が示しているように、人間の社会は一直線に進歩発展していくものではなく、ジグザグとゆっくり歩んでいくようです。天平のロマンはまだまだ実現途上です。

小金井雑学大学の皆さんは、歴史に限らず幅広く地域の問題を学ばれています。おそらく地域の中で活躍の方々も多いのではないかと拝察しています。これからも共に学び合い競い合つて、より良い両市を築いていきましょう。



第 427 回講義 10 月 2 日

## 新理事紹介

私は市内貫井南町在住の 67 歳、損害保険業界をリタイアしたあとは社会生活が狭くなり、地域社会デビューです。

まだまだ頑張れます！どうぞよろしくお願ひ致します。

小嶋雅昭



生活に潤いを与えてくれる雑学大学。その運営のお手伝いをしながら、自らも多くを学ぶことに喜びを感じております。微力ながら、少しでもお役に立てるよう頑張りたいと思います。

大塚和彦



# 日常生活に星空を眺める楽しみを

元プラネタリウム解説員・小金井市民館貫井北分館長

村山 孝一

物心ついた頃から図鑑が大好きで、特に宇宙の図鑑がお気に入りでした。小学4年生の時、教科書に書かれていない星座を探し出し、星空は「動く」ことを

自分で確認できた時の感動は、今でも鮮明に覚えています。自然科学の現象を、図鑑での知識から結果を予想し、観察で確認できたことは、自分にとって足が震えるほどの大発見でした。昭和52年11月24日の観察として、



第430回講義 11月20日

以来40年間続く「天文観測ノート」の1冊目1頁目に記録されています。そのノートは、私の原点のような存在で大切な宝物です。

星空を眺めることが日常生活の一部となつて、40年目を迎えます。世界史や日本史に登場する歴史上の人物も、同じ月と星空を眺めていたことでしょう。現在、地球上には約73億人が暮らしています。国や住んでいる環境が異なる中、世界中の人々も、同じ月と星空を眺めています。

科学が今ほど進歩していなかった頃、昔の人々は、どんな気持ちで夜空を眺めていたのでしょうか。現代より、星ひとつひとつが神々しく感じられ、神秘に満ちた気持ちで眺めていたのではない

でしょうか。物語を書いたり歌を作るセンス、絵画を描く創造力など、何かを表現できる才能をお持ちの方は、星空からインスピレーションを受けて素敵な作品を創作されるのだろうと思うと、作家や音楽家、芸術家を羨ましく思います。

天文学は数学や物理学といった理系のイメージが強い分野ですが、宇宙は天体観測だけの対象ではありません。講義の中でお話しさせていただいたように、その楽しみ方はたくさんあります。将に星の数ほど、楽しみ方があるでしょう。

超越した時間と空間が広がる宇宙の世界を想像しながら夜空を見上げ、心を自由に遊ばせてみてはいかがでしょうか。星空を眺めることが、日常生活での楽しみのひとつとなりましたら、これほど嬉しいことはありません。

## 編集後記

雑学だより24号をお届けします。平成28年は幽霊の額の三角の謎から始まり、色々な楽しい講義が続きました。次は私が話してみよう、この人を紹介しようか、という方がいらっしゃいましたらぜひお申し出ください。皆で雑学大学をつくっていかれたらと思います。

田中留美子 記

